
天体観測

レプリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天体観測

【Zコード】

Z0788A

【作者名】

レプリカ

【あらすじ】

梅雨の始まりにふと思い出す小さな過去。大人になりきれない社会人のぼく。そんなぼくがこの日々に何を感じるか。みたいなわからない内容です。

今はなく、
それでも届いた太古の光。

星の名を忘れて久しい。

五月雨がひどく鬱陶しい梅雨の始まりだった。

ぼくはいつもよつと体を起こして会社へ向かう。

傘は面倒でさすのを止めて小走りに見慣れた道をゆく。

路地裏の黒猫だとか、カンカン煩い遮断機、もう使われる事の無い寂れたバス停だと眼はいかない。

長い階段を登ればもう会社だ。

味気なくて代わり映えもしない。

こんな乾燥した痛みにも似た日常に何時ケリがつくんだろうか？ふと振り返る。

アスファルトの地面に小さな水溜まりが出来ていた。そこから青い空の亀裂が見てとれた。永い夢を見ていたような気がする。本当に花火みたいに危うかつたあのはかなさ。ぼくは暫らく動けなかつた。

乾いた夜は夢を見ない。

また今日も口が落ちて帰路につく。
目の前で遮断機越しに過ぎる電車。

そこから覗ける顔は一様にくたびれている。

「 、 」

それが過ぎると線路の向こう側が否応無しに視界に入る。
ただの道が横たわっている。
そんな事わかっている。

浮遊解。

出したくない、

もうその答えは目の前に突き付けられ続けているのに。
心は悲鳴を上げない。

朝日音 澄火。

そこにしかなくそこには無い存在。

ウロ覚えな笑顔がさらりと思考を掠めるノイズになる。

僕は、ただ、冷たく、強い、大人にならなくちゃ。
踏み切りを渡る。

梅雨のためか世界は随分水に満たされていて、
街が水没したかのような錯覚を抱かせる。

くらくらコレテ、
ふらふらウツロウ。

空には星が滲んでいてその冷たさが胸につまるアスファルトの薰り
を切り裂いた。

待つて！！

振り返る。

けれど、

誰もいるはずはなく。

仕方ないので少し自嘲して帰路についた。
薄暗い自分の城は随分とみずぼらしい。

社員寮にでも入りやよかつたよ。

帰る度にそう思う。

しかしあつぱり狭くても自分の部屋の方がマシか。
テーブルの灰皿を自分の近くに寄せて窓を開ける。
スースをきつちり脱いで着替えてからやつと煙草に火が灯せる。
これがスイッチでぼくは家にいるのを実感できる。
空だけを見上げて、たまに灰を落とす。

暫らくそうして、

静かに立ち上がりて一番大きいバッグを取り出した。
その中に有りつたけの菓子を詰め込んで、

それから最後に天体望遠鏡を大事に閉まつた。

息が切れてる。

挫けそうな足をただ地面に叩きつけてひたすらに進む。
夜の闇を搔き乱す。

歓楽街の喧騒もぼくには関わりの無い随分遠い光。

そんな光が前から後ろへ幾つも過ぎて遮断機の前に立っていた。
大した距離走つてないじやん。

情けなくも呼吸が整わないぼく。

……、
カンカンカンカンカン

視界が赤く焼き付いて点滅を繰り返す。
時計を見れば日が変わりそうだった。
レールの上を電車が駆け抜けていく。
それはすぐに過ぎて遮断機が上がる。

待つて！！

大きく深呼吸、
ぼくは再び走りだす。

夜気はマトワリ着いて水みたい。
そんなんだから疲れるんだ。

けれど先程よりは脚が軽い。

つまりは速度も上がり、

前から後ろへ景色も進みやがる。しかしそれでもふりきれないんだ。
巨大な蜘蛛の巣に引っ掛けた昆虫みたいに僕は絡む糸をホドケナイ。

一つ解く度一つ口づ増え、更に絡んで。

やめろヤメロ止めろ辞めろ病めろ！

がつん、

と脚が縁石に引っ掛けたらしく盛大に前に放られて世界が暗転する。

ぐるぐるぐるぐる。

溶暗。

痛み。

そして 僕は田が覚めて、星の下にいた。

虚ろな頭は何度も綺麗だと繰り返して、

心はそれを反芻した。

もしこの風景を閉じ込める魔法遣いだがが居たところでそれは意味無いことだと気付くだろう。

少しこめかみが痛い。

少し痛いだけで済んだのは誰かの優しい手が撫でていたおかげだろう。

僕はその見知らぬ田い友人を見るために視界をそちらにむけた。

ただ、ほんの少し。

奇跡に触れた、

「あはは、目、覚めた?」

からかうように笑う君。

「…うん。」

どこか釈然とまるで星靈のぼく。

「ねえ、何で待つてくれなかつたの?」

少し責めるような口調で君はぼくに聞いた。
答えは知っている。

「じめん、気付かなんだ。」

それを聞いて君は首を小さく振る。

そして一人空を見上げてひたすら黙つた。

そこには無限の光。

限界を越えた化石の海。

「虚空だ。あそこは離れすぎてる。」

「風が吹くもの寂しくないわ。」

そうした後でぼく等はバッグから有りつたけのお菓子を引っ張りだ

して全部の袋を開けた。

下らない事を話してまた下らない事をいひこち笑つて時間は過ぎる。

やがて空は白みはじめるのも仕方なかつた。

東雲。

薄い雲から冷たい雲が注いだ。

涙みたいな雲だとぼくは。

隣を見る。

「もう、行かなくちや。」

『氣まずそう』、それでもやつぱり彼女は微笑んで、空の雲みたいな一つの雲をぼくにみせた。

一等星よりもずっと輝くはかないそれには触れられな『』よ。すべてが壊れてしまうから。

「星達が悲しんでる。

風が吹いてないから。」

そんな、

「うん、氣を付けるよ。ぼくは見送つてやれないから。」

君には、

「私は、」

君とだけは離れたくなかつたよ。

一人は一度と振り返らない。

風、そういうのになりたい。

人に思いをね、すいすいって届けちゃうんだ！
壁も、砂漠も、海も、みんなかわして届けるんだよ！

シルサマー

いつもの時間に起きる。

歯を磨いて、顔を洗つて、寝癖を取る。

そしてぼくはまた今日もネクタイを首に通してスーツに縛られた大人になる。

朝はいい陽気でいささか汗をかいだ。

それでもいいと思うのはもうすぐ夏が暮れて思い出にかわってしまふからだろう。

ぼくは通勤ラッシュの列車を静かに見送つて視線を下に落とした。彼岸にいった彼女に贈った花は枯れてしまっていた。小さい花瓶からそれを取り除いて。

新しい花をいけてあげた。

天見音 風香。

天を見て風と吹いた星。
風になりたい。

君はいったね。

なら届けて欲しい。

最初で最後の手紙をね。

この天体で溢れた星に居座るこのぼくから君に。

風ほほをなせた、さよなら。

今、一際強い、風が吹いた。

こんな暑気のなか、空気すら裂けるような冷たさが頬を伝つた。
吐き出す息は白すぎて視界を霞ませる。
喉が焼けるように喘ぐ。

しかし、

はたして何を言いたい？それさえ思い出せれば良いのに。

はたして何を言いたい？それさえ思い出せなければ意味が無いのに。

大切な一言。

ぼくは空をあおいだ。神様、一瞬でも構わないから。
ぼくが彼女を忘れない魔法を下さい。

それは、

すでに十分に叶っていたわがままでしかなくて。

もう、なにをしても満足しないこのぼくは、
願う。

風が吹き続く日が無くならないように。僕達にはたつた片翼が欠けていた。

翔ぶ夢は見ない、

飛ぶ夢は夢は抱くけど。

片腕はいらない、

利き腕はいるけど。

ガラクタは愛せない。

完璧よりはマジだけど。

嬉しいよりは沢山の痛みを知りたい。
きっと其の方が失うのは恐くない…筈だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0788a/>

天体観測

2010年10月9日19時46分発行